

沖方丁のこち留

こちら渋谷警察署留置場

沖方丁・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

はじめに

この手記を「喜劇」としてつづる理由

本書は、あるとき突然、想像もしていなかった体験へと投げ込まれた作家・沖方丁と、その一件に関わることとなった妻、警察、検察、裁判官、弁護士、あるいは留置場で出会った人々による、「喜劇の物語」です。

『週刊プレイボーイ』（集英社）誌上で13回にわたり連載された原稿を、1冊にまとめたもので、連載中にいただいたご指摘に従い加筆修正を行っております。そういえば連載中、イベントなどで女性読者から「男性向けの雑誌なので書店で手取りにくいです」と困った顔をされることもしばしばでしたが、こうしてめでたく書籍になりましたので、ぜひ安心して（？）お手にと取っていただければ幸いです。

さて——本書で語られる体験について、あらかじめざっくり申し上げますと、「お前の妻がDVで訴えている」と告げる刑事によって連れ去られた私は、警察署内の留置場に閉じ込められ、かと思えばだんだん取り調べがおかしな方向に進み、結局なんだったのかはつきりしないまま10日と経たずして無罪放免——ただし「妻に知られていない場所で暮らすこと」という条件付きで、物のように路上に放り出

された、という次第。

こう書くと、なんとも不条理だとか、悲劇的な目にあつたとか思われる方もいるかもしれませんが。とりわけ、警察というものの現実を知る方などは——あるいは逆に、警察は「正義の代名詞だ」と素朴に信じてしまっている方なども——とても笑える話ではない、と思つてしまふことでしょう。

しかし私は、これは実に笑えるし、むしろ笑うべきことであると心底から思つています。

取り調べ室で手錠をかけられ、ロープで椅子に縛りつけられたときも、自然と口をついて出たのは、

「こりゃ、笑うしかないな」

という言葉でした。

それから1年が経つた今、当時のことをつぶさに振り返つても、やはり、「笑うしかないな」と思います。そこで体験した一切はつまるところ、途方もない喜劇であつた、と断言できるのです。

もちろん、こうした態度は私個人の性格でもあり、ある意味、悪癖でもあります。後日、お世話になつたふたりの弁護士と一緒に食事をした席でも、

「あなたのように、留置場の面会室で弁護士と話しながら、自分の置かれた状況を斜め上から見下ろして、ゲラゲラ大笑いする人なんていませんよ。たいてい意気消

沈して、『なんとか助けてください』と泣くのが普通ですから』

というふうに言われたものです。つつい珍しい体験をするとテンションが上がってしまうのは作家の性であり、本人も致し方ないのです。

ただ一方で、そうした「馬鹿笑い」こそ、この国の司法における驚くべき現実を目の当たりにしたとき、真にとるべき態度である、とも思うのです。

一切を悲劇ととらえれば、解決は見い出せません。悲劇というのは、避けがたい運命や、動かしがたい現実直面し、それでも希望を失うまいとする物語です。厳しく耐えがたい人生を知り、不条理を受け入れるためのものだといえるでしょう。

これに対して喜劇は、人生を縛りつける欺瞞や虚栄といったものは一切合切、覆すことができる、という希望を与えてくれます。繕われた体裁を笑い、形骸化した理念を笑い、偽りの善意に隠された悪意を暴露します。そうすることで、物事は本来いかにあるべきであったか、現実の自分たちがどれほど本来のあり方からかけ離れてしまっているか、といった教訓を、鋭く突きつけるのです。

本書で紹介するのは、司法の現実が、世間一般の常識などまったく通用しない、不条理で複雑怪奇な「不思議の世界」と化していることを示すエピソードの数々です。テレビドラマに登場するような、民衆の願いを代弁し、頼もしく戦ってくれる警察や検察はいっこうに現れません。「真実の解明」とか「正義を代行する」とかいった決まり文句は、ただの民衆の願望にすぎず、現実には存在しないことを思い

知らされるでしょう。

その失望感たるや想像を絶するほどです。だからこそ、私はそれらの体験をできるだけ笑えるものとしてつづり、こうして読者にお届けすることを決めたのです。本書をお読みになる方の中には、「もし自分が同じ立場になったら」と想像し、つらくなってしまう方もいるかもしれませんが、しかしそのとき当人である私は、大いに笑っていた、という事実を、ぜひ念頭に置いていただきたいのです。

前近代的というしかない留置場の実態、そこで私が出会った人々とのやり取り、刑事の取り調べのありよう、そもそも何の訴えだったのかわからなくなるような意外な展開など、大いに楽しんでほしい。そうすることで、私たちが漠然と抱いている、「警察は信頼できる組織である」「検察は人を罫にはめたりしない」「裁判所は事実をありのままに判明させる場所」といった思い込みが、木っ端微塵に打ち砕かれることにも、大笑いできるでしょう。

決して、いたずらに読者に衝撃を与え、社会に対する不信や不安の念を抱かせたり、司法に関わる人々への嫌悪をかき立てたいわけではありません。現実をそのままお届けし、それがどれだけ笑えるものであるかをお伝えするとともに、笑われることなど想像もしていない人々に、私と読者のみなさまの笑い声を届けてやろう、というものです。

繰り返しになりますが、喜劇こそ、ものごとを覆し、どれほど強固な現実であっ

ても変えることが可能である、ということをお教えしてくれるのです。

「こりゃ笑うしかない」と思うとき、人は、それに耐えようと身構えるのではなく、より良くするにはどうしたらいいか、という思案を芽生えさせているものです。そして結局は、そうした態度が、良い社会の建設へつながるのだと私は信じています。私の体験は、実質9日間で終わりました。

それは、どうやら司法の世界では「短い」ようです。しかし、司法のとんでもない問題と直面するうえでも、経済的・社会的に深刻な損失をこうむるうえでも、十分すぎるほどの期間といえるでしょう。

「被疑者の2割は冤罪^{えんざい}」と言われながらも、「起訴後の有罪率は99・9%」という驚異の数字を誇る日本の司法。

社会人に致命的な打撃を与え、ともに逮捕勾留された者との共感と結託を促し、かえって反社会的な行動へと導きかねないにもかかわらず、司法の人々はさっぱり気にしない「馬鹿げた9日間」を、これから読者のみなさまとともに笑い飛ばしてまいりたいと思います。

ご準備はよろしいでしょうか？ 大きく口を開けて、わははと笑い飛ばす用意は整いましたでしょうか？

それでは、私が逮捕された衝撃の夜のことから、お話しするとしましょう――。

はじめに この手記を「喜劇」としてつづる理由……………3

序章 冲方丁逮捕!……………11

第1章 留置場生活のはじまり……………27

第2章 ハズレの検事……………52

第3章 セルフ身代金……………69

第4章 裁判官はハンコ屋……………82

第5章 最悪の事態……………95

第6章 悪魔の証明……………108

第7章 2度目の検察庁……………121

第8章 釈放決定……134

第9章 監禁から軟禁へ……149

第10章 不起訴処分……160

第11章 社会復帰……174

終章 この事件が意味するもの……185

対談 周防正行×冲方丁……198

日本の刑事司法、諸悪の根源は？

おわりに 「馬鹿じゃないのか」と笑うこと……216

序章

冲方丁逮捕！

突然やってきた3人の刑事

3人組の刑事が私の前に現れたのは、まさに突然のことでした。

2015年8月22日、土曜日の夜——私は東京・秋葉原にて、「冲方サミット」と題した、ファンとの交流と作品発表を目的としたイベントを催した直後でした。

私を含めた約10名の編集者やプロデューサーといったスタッフ陣は、同じ会場内で打ち上げをし、イベントでの反省や次回開催についてビール片手にわいわい話し合っていました。やがて宴もたけなわという頃、ふいに編集者のひとりが私に近づき、こう告げたのです。

「奥さんの関係者だという方が、店の入り口に来ているそうなのですが……」
私はきょとんとなりました。妻の知人？ わざわざイベント後の、打ち上げの席に訪ねてくるような人物に心当たりはありません。

「いったいなんだろう？」といぶかしく思いながら店を出てみると、そこにはスーツ姿の3人

の男性が立っていました。

ひとりが警察手帳を取り出し、ちらりと控えめに提示しながら、こう言うのです。

「沖方丁さんですね。奥様のことでお聞きしたいことがあるので、署までご同行願えませんか」

ここまでは、まるで刑事ドラマのワンシーンのようでした。私は大いに戸惑い、咄嗟にいろいろなことを想像しました。

最もありそうだと思ったのは、妻が事故にあった、ということ。のちのち、小説で書くうえでも気をつけようと肝に銘じたことですが——こうしたとき、人は「自分のことだ」とは思えず、それゆえ、つい相手の言うがままに行動してしまいます。警察もそれがわかっているから、あえて遠回しに、漠然と話すことで、自分たちの思いとおりに私を誘導しようとしていたのです——逃げることができな場所へと。

この誘導は、大成功しました。私は、まさか自分自身が被疑者として同行を求められているとは、この時点では夢にも思っておらず、彼らに対抗するすべも心構えもまったく持たないまま、まんまと同行を承知したのです。

私は、イベントに参加した編集者らに、「事情はよくわからないのですが、ちょっと行ってきます」と言い残し、手荷物をまとめて店を後にしました。

そして、警察官にうながされるまま、一見して普通の乗用車にしか思えない覆面パトカーに乗せられた瞬間——9日間にわたる、理不尽かつ不可解な留置場生活が幕を開けたのです。

冲方丁逮捕に浮き立つ、署内の異様な光景

後部座席の右側に私を乗せた覆面パトカーは、秋葉原の打ち上げ会場を後にし、渋谷警察署へと向かっていました。

妻の身に何か起こったのか、あるいは妻が何かやらしたのか……。同乗している刑事たちは、いくら尋ねても「詳しくは署に着いてから」と、まるで取り合ってくれません。

つい数分前に店を出た際には、編集者に「明日またメールします」などと言い残したくらいです。ですから、これから自分が取り調べ室で尋問を受けることになるなど、この時点では想像もしていません。

ただ、こうしてわざわざ警察が出張ってきている以上、大きなトラブルが起こっていることだけは想像できました。急ぎの用事がある関係者には、車中でフォローのメールを送ったりにしていました。すると――。

「誰に連絡してるの？」

隣に座る刑事のひとりが、ぶっきらぼうな口調でそう聞いてきます。

突然、人を連れ出しておいて、なんて失礼な物言いだと不快に思っていたら、続いて「まさか、誰かを署に呼ぼうとしたりしてないよね？」などと言ってくる。

「呼ぶ？ 誰をですか？ 弁護士とか？」

「ほう。どうして弁護士を呼ぼうと思うの？」

本格的に不穏な空気を感じ取ったのは、このひと言がきっかけでした。彼らは言質を取ろうとしている。私に何か言わせようとしている。「後ろめたいことがあるから弁護士を呼びたがっている」ということを私に言わせたいのだと感じました。

「そもそも、妻は今どうしているんですか？」

「なんで、そんなことを知りたがるの？」

一事が万事、車中で繰り広げられる会話はこの調子です。こちらが何か質問すると、逆に質問を返すか、はぐらかすかして、私に一切の情報を与えようとしません。

車が渋谷警察署に到着したのは、深夜0時を回ろうとしていた頃でした。

この時点で私は、すでに疲労困憊の状態にありました。なにしろ秋葉原で催されていたイベントは飲酒しながらのトークショー形式で、その後の打ち上げと合わせて4時間ほど飲みっぱなし。そうでなくても連日めいっぱい執筆を続けていた時期でもあり、とにかく早く帰って眠りたいというのが本音でした。

そこで詳しい事情を聞く前にまず、車を降りると、署内の自動販売機で目覚ましのためコーヒーを買わせてもらうことにしました。渋谷警察署の1階に設けられた喫煙コーナーのような一角で、何も事情を話さなくせに愛想だけは良い刑事がだんだん不気味に思えてきます。

私はとにかく少しでもヒントを聞き出そうと試みますが、やはり何も教えてもらえず、こちらが質問に質問で返してくるばかりです。

そこは非常に手狭なスペースでしたが、私が缶コーヒーを片手にたばこを吸っている間、ふたりの警察官がぴたりと横に張りついていました。今にして思えば、これは逃亡防止のためだったのかもしれない。ふたりは不自然なほど親切で、私が自動販売機にコインを入れると、「お取りしましょう」と身を屈めて缶を取り出してくれ、飲み終えた後には空き缶を「捨てておきましょう」と回収しようとする。そうしながら、こちらの一挙手一投足を見張っているぞ、とプレッシャーをかけるような視線を私に向けるのです。

一方で、署内では妙に浮ついた様子が目につきました。

深夜であるにもかかわらず、ニコニコと口角を上げている刑事や、指をパチンパチンとリズムカルに鳴らして口笛を吹いている刑事までいて、なんだか「ウキウキ」しているのです。深夜ともなると刑事もハイになってテンションが上がるのでしょうか。そのうち私とハイタッチでもしそうです。さすがに内心では「様子がおかしい」と思いましたが、何がおかしいのかもこの時点でははっきりしません。

一服を終えた私は、刑事にうながされて署内のエレベーターに乗り、上階で降りました。確か4階だったかと思いますが、廊下に出て、ドアのひとつから部屋に入りました。左手には刑事が働くデスクが並ぶ広い部屋があり、右手にまた狭い廊下といくつもの部屋がありました。

その部屋のひとつに通されて初めて、私はそこが、市民が相談に来るような場所とはとても思えない、殺風景でいかにもものしい取り調べ室なのだと悟りました。壁には暴対法のルールなどが張り出されているほか、「録音・録画禁止」「喫煙禁止」「外部との連絡禁止」など

など、多くの禁止事項が明記されています。

さらに入室すると、「まずは規則なので、荷物をお預かりします」と、手荷物をすべて取りあげられてしまいました。そして、向かいに腰を下ろした刑事がおもむろにこう切り出したのです。

「……というわけで、逮捕状が出ていますので」

いきなりそう言われて、私の頭の中は真っ白になりました。

咄嗟に脳裏をよぎったのは、その逮捕状というのが「いったい誰の？」という疑問です。なんとか混乱を振り払い、目の前に広げられた逮捕状に集中し、いったい何が書かれているのか読み取ろうとしました。

まず、標題の下に私の本名、そして「8月21日午後7時頃、事務所があるマンションのエントランス前で妻と口論になった際、妻の顔を右手拳で一発殴って前歯破損の疑い」といったような文面が続いているのがわかりました。

酔いは一瞬で吹っ飛びました。それは、率直に言って、どこから突っ込んでいいのかわからない文書だったからです。

とりわけ仰天したのは、「前歯破損」の文字。身に覚えがないという以前に、まず思ったのは、「歯が折れるほどの強さで殴れば、普通は殴ったほうの拳も傷ついているはずだろう」ということでした。

実際には傷ひとつないこの私の両手が目の前にあるにもかかわらず、この刑事はなんとも思

わないのだろうか？ 逮捕状を見せられた衝撃と混乱の一瞬が過ぎ、私は早くも、警察の「不条理」にさらされていることに、うすうす感づいていたのです。

完全な死角だった「妻の訴え」

さて、連載時はここで週刊誌のニーズとして、わが家について簡単に説明しておく必要があるとのこと、いろいろと書きつづられておりました。

ただ残念ながら、夫が作家であるという多少の珍しさ以外、ほかに変わった点はありません。何かこう「読者がぐっとくる」点はないかと振り返ってはみたものの、結局、「夫と妻とふたりの子どもの核家族」という面白みのないカテゴリーに属しているだけです。

とはいえ、人物のプロフィールというかプライバシーを並べたてることには週刊誌的な一定の意義があるようです。連載時は、「私たち夫婦は東京で出会い、2002年に結婚したのをきっかけに、妻の故郷である福島県福島市に移り住み、それなりに平穏な生活を送っていました」といった、だからどうということもない略歴を載せているので、ここでも再掲することにしましょう。

移住から約10年後の2011年3月、東日本大震災において、国民的大惨事たる福島第一原発の事故が発生。復興努力を上回る、えせ復興ビジネスが横行するようになった地域から出て行くことを決め、もともと住んでいた東京に舞い戻ったのでした。

思いがけない大災害を間近で経験し、経済的には大変な損失を受けはしたものの、代わりにたいていのことには動じなくなった精神でもって、3年がかりでどうにか生活を立て直せるめどがついたところでした。

いってみれば、今回の唐突な逮捕劇は、震災後やっと仕事と生活が安定しつつあった矢先のトラブルだったわけです。

ここでまた週刊誌的には、「当時の夫婦仲は？」という点に言及してほしいようですが、こういう経緯があると自分でもあの夫婦生活はなんだったのか、よくわからなくなる、というのが本音です。わけもわからず逮捕された後で、さすがにどんな人間も、「問題などひとつもない誰もが羨む理想の夫婦でした」などと書く気にはなれないでしょう。

かといって、「問題だらけのいつ爆発するかわからない火薬庫のような夫婦生活でした」と書いても、なんとかして辻褄を合わせようとしているだけで真実から遠ざかってしまう気もします。日頃、フィクションを書くことを生業としているぶん、たとえ自分の文章であっても、無理にでっちあげることには敏感なのです。だからこそ刑事の強引な取り調べに耐えられたのでしょうが、こうして過去の夫婦仲を書こうとすると、あれが問題だったのだろうか、こういうのが悪かったのだろうか、と永遠に解けないパズルをいじくっているような気分させられます。

とりあえずの結論としては、中年と呼ぶべき年齢で出くわすさまざまな課題において——仕事が増え、支出が増え、男女の更年期が迫り、地域や人とのつきあいが複雑化し、男女の愛か

ら子への愛へと優先順位が変化し、子の教育と養育の課題が常につきまとい、自由な人生とはなんだったのだろうか、と男女ともに考え直し始める時期において——若い頃のように互いに寄り添えず、支え合うには至らなかつた、ということでしょう。

なんであれ、若い頃の愛と信頼が過去のものとなったことは確かですが、それがこの事件の前なのか後なのかもわからなくなってしまいました。

ちなみに弁護士から、「夫婦仲について下手なことを書けば奥さんから名誉毀損で訴えられる危険があるので気をつけてください」と忠告を受けてはいますが、これこのとおり、結局のところまったく面白みのない事実を並べるしかありません。

きっと私の逮捕の報道でも、何にクローズアップしたらいいかわからず困ったことでしよう。過去、わが家で最も大きかった出来事は原発事故ですが、さすがに「原発の爆発のショックでDVが日常化したのでしよう」などと報道することはできなかつたに違いありません。字面は衝撃的で、こっちのほうに笑えますが、なんの説明にもなっていないという点ではこれまでに書いたことと大差ありません。

ちなみに、「名誉毀損で負けた場合、いくらくらい払うものなんですか？」と弁護士に尋ねたところ、「公人ではなく私人だと、だいたい、最大で100万円くらいかな」とのこと。

安い金額だとは思いますが、想像していたよりもはるかに低プライスです。なるほど、週刊誌がさまざまな方面から訴えられても、それくらいの支出なら十分耐えられるし、むしろお釣りがくるというわけです。訴えられないように気をつけろと忠告されている私が言うのもな

んですが、もうちょつと高額でもいいような気もします。しかし、名誉毀損の訴えで莫大な金額をせしめられるようになれば、あっちこっちで名誉毀損ビジネスが横行し、メディアが萎縮するところではなくなるのだとか。

それはさておき、ここで重要なのは、その名誉毀損にあたるような記述自体が私のなかから出てこないということ。つまりところ、私にとっては妻が訴えているということそのものが「完全な死角」であったのです。

逮捕状の記載に、あまりにも意表を突かれた私は、「え？　ウソですよ、それ。誰がそんなこと言ってるんですか？」と、警察相手ではまったく効果のない反論を口にしていたのでした。

朝まで続く不毛な取り調べと手続き

「これ、デタラメですよ。私は殴ってないし、彼女の歯も折れてなんてないでしょう。そういえば差し歯を治したいと言っていたので、そのことじゃないですか」

連行された渋谷警察署の取り調べ室で逮捕状を見せられた私は、とにかく何かの間違いだと思ひ、反論を試みました。しかし、担当の刑事には「ふうん、そうなの？」と、余裕しゃくしゃくの表情で受け流されてしまいます。

そして、「ま、逮捕ということ。よろしいですね」とこちらの言うことなど完全に無視して、別の刑事が私に手錠をはめ、ロープでスチールパイプの椅子に縛りつけたのでした。

日本警察の比類なき不条理劇はこのときとつくに開幕しており、早くも常識的な会話は成り立たなくなっていました。そもそも刑事に、被疑者の言うことをまともに聞く気などありません。なぜなら日本の刑事裁判では、警察や検察が作成する供述調書がきわめて大きな力を持っているからです。警察も検察も、あらかじめ調書の筋書きを念頭に置きながら取り調べを行います。

つまり警察の取り調べとは、当事者から事実関係を聞き出して捜査の参考にするのではなく、もっぱら用意された筋書きに当てはまることを被疑者に言わせ、それを自白として記録することとをいうのです。それ以外の言動は「事件と関係ないこと」として黙殺してしまうのですから、編集者の言うことを聞かない作家も顔負けの無頼派です。

しかも、税金で養われたシナリオライターたる警察・検察の文章能力、あるいは全国の司法関係者が膨大な時間と税金を費やして培った文章作成のための技術は、作家である私をして驚嘆せしめるレベルなのです。

これがいわゆる「自白の強要」というもので、そんなことはつゆとも知らない私を、刑事が悠然と観察しています。

きつと向こうにしてみれば、ほろ酔いかつ疲労困憊の私が相手ですから、少し攻めればあっさり自白するだろうと高たかをくくっていたのでしよう。こちらがどれだけ事情を話そうとしても「うんうん」と聞き流すか、あるいは「ちゃんと話は聞くからさ、先に手続きだけ進めさせてよ」などと相手にしてくれません。

この手続きとは、私の経歴の確認や、指紋の採取、三面写真の撮影などをいいます。完全に犯罪者の扱いです。何から何まで不当だと思い、頑強に抵抗してやろうと思っていた私は、しかし結局、素直にこの手続きにつきあいました。実のところ、手続きを担当した鑑識の男性と女性の刑事が、ことのほか物腰が柔らかく、指紋を採る機械のことなど丁寧に説明してくれるので、私はうっかり興味津々となり、彼らの言うとおりにしてしまっただけでした。

こちらの好奇心をくすぐる見事な作戦——という冗談のように思われるかもしれませんが、「親密で楽しい気分にならせて言うことを聞かせる」こともまた、警察の常套手段なのです。

ちなみに、三面写真を撮影する部屋の隣には、「現場を再現するための人形」を置くスペースがありました。ほかにも、いろいろな道具が積み重ねられており、女性の刑事が「これは暴行の再現です。女性の被害者から話を聞くときに使いますね」などと解説してくれます。

まるでアトラクションの道具部屋を見ているようで、用途を考えれば不謹慎ではありますが、正直、楽しかったのは事実です。担当した鑑識の男性も女性の刑事も、私のような好奇心を剥き出しにする人間は扱いがたやすく、楽な仕事だと思ったに違いありません。

私はここで、一本ずつ、左右すべての指の指紋を採られた後、写真を撮られました。映画などでもたまに見かける、正面、左、右と、それぞれの角度から顔を写されるのです。

こうなると、早くも完全に犯罪者扱いですが、実際には「逮捕罪」ではありません。警察は、まだ無実であるかもしれないすべての人間に対して、こうした作業を問答無用で行っているのです。

ただ、「本当の犯罪者」も多く収容されるわけですし、この段取り自体は必要なものであると理解できます。しかし、何から何まで、人権などお構いなしのこの世界では、指紋を採取されるだけでも、こちらの自尊心が少しずつ突き崩されるような気分を味わいます。

そうして手続きを終えた私を待っていたのは、手錠とロープと取り調べ室、そしてこちらの主張になんの興味も示さない担当刑事です。

ちなみに警察署内では、移動する際には常に手錠がかけられます。そして取り調べ室で椅子に腰を下ろすと、手錠が外され、代わりにロープで腰のあたりを椅子に縛りつけられるのが常でした。手錠はすぐにまたかけられるよう、私の腰のロープに吊すようにして固定します。

私の荷物はすべて奪われ、携帯電話すら返してもらえませんが、仕事相手に連絡させてくれと言ひ募っても、刑事は「電話がしたいならかけてあげるから番号を書いて」と返すばかり。「通信の権利は守ってあげている」という体裁を繕っているのです。

しかし、今どき電話番号を暗記している人などどれだけいるでしょう。事実上、外部と連絡を取るすべは封じられ、実家や弁護士に助けを求めることもできません。まさに密室であり、八方ふさがりの状態です。私にできることといえば、警察側が示す状況を否定し、真実を訴え続けることのみでした。

とにかく逮捕状の内容を認めさせたい警察は、あの手この手を講じてきます。たとえば、私に妻の愚痴をしゃべらせようと、「わかるよ、その気持ち」などと同情してみせたり、そうかと思えば突然、「今さら後悔しても遅いんだよ」などと厳しくなったりします。

私は椅子に縛りつけられて立つこともできません。身体的に不自由な感覚を与えることも、被疑者の心を弱らせ、屈服させるための手法です。うわべは親身なふりをし、殴る蹴るといったことはせずとも、こちらの自尊心を奪い、体力を削り、心を折ろうという工夫が至るところに見えました。

会話においても、私がひどい睡眠不足であるを見てとるや、今後の段取りについての説明をあえて繰り返しえんえんと語るなどして、こちらを疲労させ、判断力を鈍らせようとしています。やがて、私が十分に弱ってきたと思ったのでしよう。刑事の質問に、ある特徴があらわれるようになりました。

それは、「偶然だったんじゃない？」という聞き方です。

「振り返ったとき、手にした何かが、たまたま相手の顔に当たったのでは？」

「無意識に、体のどこかが相手の顔にぶつかったのでは？」

などと、今思い返しても非常に馬鹿馬鹿しいロジックを大真面目に持ちだし、なんとか罪を認めさせようとするのです。私は最初、刑事としてもさまざま可能性を考慮しないといけなからそんなことを言っているのだらうと解釈し、「うーん、それはないと思いますよ」と一応、考える素振りを見せました。もちろん内心では、そんなことあるわけないだらうと呆れ返っています。

すると刑事がだしぬけに、こんなことを言いだしたのです。

「たとえばさ、奥さんに向けて指とかさしたときに、うっかりその指先が歯に当たって、その

せいで歯が折れたけど気がつかなかった、なんてことはない？」

そのとき私の脳裏に浮かんだのは、『北斗の拳』や『グラップラー刃牙』など漫画の世界です。振り返って「うっかり」指先で人間の歯を折る？　もしそんなことが可能なら、私は拳法の達人であり、ただちに目の前の刑事をそのようにし、署内の人間をなぎ倒して出ていったことでしょう。

真面目に話につきあっていた私は、そこで初めて、「筋書きがあるのだ」と悟りました。どうにかして刑事が組み立てた筋書きに私を当てはめたい。そのためには、どんなに馬鹿馬鹿しい理屈でもいいから、私に「はい、そうです」と言わせる必要があるのだと。

そうした不条理な取り調べを受けることで、私は刑事が扱って立っている、逮捕状というものに疑念を抱くようになりました。私が逮捕状に関して最初に抱いた疑問は、

「果たして妻が、あんな誰にでもすぐにわかってしまうようなウソをつくだろうか？」
ということでした。

人通りが多い、仕事場のマンションのエントランスで、私に殴られて歯を折られた——どう考えてもウソとしては不出来です。往来する人の目もあれば、エントランスに備え付けられた防犯カメラもあります。管理室で保管されている防犯カメラの映像データを見れば、私がそのような行為をしていないことはわかるはずでした。

その疑問は、やがて私のなかでまた別の、意外な疑念につながっていったのです。

もし、逮捕状に記載されている一連の内容も、警察によって一方的に作られたものだとした

ら……？”

それは、さまざまに手を替え、品を替えて、私に「やった」と認めさせようとする警察の強引な取り調べを経験するうちに、ふっと心に湧いた疑念でした。

警察は、私を逮捕に持ち込むために、書類を整える必要があったのではないか。そしてそのために、警察内の誰かが逮捕状を「作文」し、それを妻なり他の誰かなりに認めさせたのではないか、と。その疑念は逮捕から留置場生活を経て釈放されるまで、ずっと私の頭のなかから消えることはありませんでした。

それとともに、だんだんとこの理不尽さに対する怒りが蓄えられてゆき、やがて私のなかで完全にスイッチが入りました。

——こうなったら、とことん相手をしてやろうじゃないか。これは戦争だ。

途中からはもう、妻の存在すら完全に忘れてしまっていたほど、警察との戦いに全精神を振り向けていたのです。

結局、このあまりにも不毛な取り調べは、翌朝まで、なんと9時間以上も続くことになったのでした。

しかしこれは、警察の不条理劇の序章にすぎません。ここから、警察の伝統的かつ前近代的な体質の結晶ともいうべき留置場に連れていかれ、いよいよ素晴らしき留置場生活の幕が上がります。

沖方丁のこち留

こちら渋谷警察署留置場

沖方丁・著

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定価：1,200 円（本体）＋税

発売日：2016 年 8 月 26 日

ISBN：978-4-7976-7331-9 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)